

季刊 連句 第13号

昭和六十一年六月一日発行



季刊連句 第13号 目次

つつじの柱 (南柏雜記11)	1
俳諧資料の湮滅とその保存.....東 明 雅.....	2
井草麦雅.....杉 内 徒 司.....	4
連句の読み方・味わい方 田(完).....東 明 雅.....	6
—「木のもとに」の巻—	
二十韻 春や昔.....東 明 雅.....	9
吉野紀行.....秋 元 正 江.....	10
吉野にて (脇起り) 行く春 葛 葉 子.....秋 元 正 江 捌	
櫻千本 原田千町捌 賦吉野二十韻 みよし野や 鶯	
堅香子と櫻.....東 明雅・下鉢清子.....	14
かたくりや (膝送り) 広池の花.....式田和子捌	
なんじゃもんじゃ...中田あかり捌 かたかごや...下鉢清子捌	
(第3回) 沙羅の会 春の街.....馬場彬風 春の雪.....馬場東夷.....	
吉野の会 下萌 連翹.....	18
絶頂の城 付勝練習歌仙.....	21
岡野ひさの歓迎連句興行.....井 手 樺 晴.....	23
第17回猫蓑会 五歌仙.....	24
松の花.....上月淳子 四月盡.....米谷貞子 桜薬.....内田麻子	
弥生尽.....吉沢てるよ 紫木蓮.....速水昌子	
柏連句会.....	27
藤 の 花.....下鉢清子 穀 雨.....井手樺晴	
連句教室.....	28
落 の 姑.....東 明雅 乞 食 葱.....福井隆秀	
句集「イカルスノ夢」(筆洗・東京新聞 61.4.20より)	7
連句会案内.....	29
雁帛往来.....	

つつじの柱

南 柏 雜 記 11

雅

猫蓑有志十三名が吉野の蔵王堂に着いたのは、四月十五日の昼前、朝からの小雨が降り続いていた。既に行かれた方とはとくと御存知であるが、太平記だけでしか知らなかった私には、蔵王堂は思ったよりも宏壮で堂々たる建物であった。堂の前には「大塔宮御陣地跡」という石柱が建つて、広庭かこむ四本の桜が八分咲き、元弘（一三三三）の乱を偲ばせる舞台はこれで十分というものであろう。ここは修験道の根本道場であるだけに、凡人には分からぬことが多い。折から石段を上って来た神官らしい人に、まず脳天大神と書いてある碑のいわれについて尋ねたところ、この人は神官ではないが、観光シーズンになると伊勢から案内の応援に来る人だったので、我々を堂の中までつれて行って丁寧に説明してくれた。ここで驚いたのが、標題にかかげたつつじの柱で、説明によると周囲二・八米、高さ十米あまりで、他の六十四本の大柱とともに、奈良の大仏殿

に襲ぐ大伽藍と言われるこの蔵王堂を支えているのだ。何処の山中にこんな大きなつつじがあったのか、そして、どんな因縁で、この柱になったのか、皆も不思議そうな顔をして、撫でてみるのだが、何かつるつるした感触（これはきつと多くの人が撫でるので自ら掌の脂がついたものだろう）で、是がつつじだという証拠はどこにもなかった。これから国宝の仁王門も仁王も豪壮ですばらしかった。この仁王門を見たのもさきの伊勢の案内人の注意によるところ、まことに吉野というところは花の美しさはもろろんであるが、何か妖しい古代の日本の亡霊がまだまだ残っている感じがする。ところで、この文の初めに書いた脳天大神だが、御本体は蛇で、首から上、頭の病はすべて癒して下さるそう、その案内の人も左の薬指に銀の蛇の指輪をはめていた。効験あらたかだそうだから、ぜひ一つ欲しかったが、売っている所が分からず、脳天大神の宮は石段を四百段おりたはるか下の溪間にあるというので、参詣するのにもあきらめざるを得なかった。脳天パアの私にとってかえすがえすも残念なことであった。

俳諧資料の湮滅とその保存

東 明 雅

俳諧（連句）は芭蕉の時代から数えても約三百年経過している。明治の頃までは愛好者もかなり多く、一族に有名な俳諧師が居れば、家族、親戚はこれを誇りにして、彼ら書いた著書・伝書の類、短冊・色紙から書簡などの断簡零墨にいたるまで大切に保存し、散佚させるようなことはなかった。

しかし、近頃では俳諧（連句）そのものの権威とそれに対する認識が殊の外欠除して来て、せっかく、自分の父祖の心血をこめた作品も記念となる書簡類も、全く価値を認めず、粗末にされているのが実状である。これは時代意識の変化、文学に対する認識の変化によるものが多いだろう。俳句も俳諧（連句）も分からぬ人を取っては、見も知らぬ先祖の書き残したものは全く反故同然であり、ことに都会では住宅事情も窮屈になって、よし、分かっているも保存することが不可能な場合も多いに違いない。蔵の隅で鼠の巣となったり、ひどいのは塵紙交換に出されたりするものも多いのではないか。

私は五・六年前に高崎の女子短大に教えに行ったことがある。高崎には根津芦丈先生の俳友として著名な方があっ

たので、私はその御子孫の方に電話をかけた。しかし、その返事は全くつれないもので、

「確かに親父は連句に熱心でした。しかし、私は何の興味もない。それで一切の資料は処分してしまつて、今お見せするものは何もない」。

私は落胆すると共に、その人に対する憤りを禁じ得なかつた。

これと全く反対なのが高仲静美さんの場合である。高仲さんは四十年前になくなられたお祖父さんの俳諧資料を郷里で見つけ、難解な字を一つ一つ解説して、昭和五十六年十二月、「中央公論事業出版」から、「紅葉日記」として出版された。私もその一本をいただき、読んで行くうちに、そのころの俳諧師の生活の実体が生き生きと描かれて、そのを知って大変うれしく、「季刊連句」四号・五号に「俳諧師―その心と生活」という文章を書いたことがあったが、それは高仲さんのお祖父さんたる神戸春雄が信州埴科郡を出て、大正三年十月からその年の大晦日まで中部地方を行動して艱難辛苦をなめた有様が、こと細かに書かれ、感銘したからである。もし、高仲さんがそのような事

をされなければ、神戸春雄という人物は永久に連句の一頁から消え、我々も彼の生涯と俳諧を知る機会を失ったであろうと考えると恐しい気がする。高仲さんは五十八年三月にも「俳諧連句集」（中央公論事業出版）という神戸春雄の作品集を出版頒布された。地下の神戸春雄は嘸かしよるこんでいることであらう。

このところ「連句辞典」という本（東京堂）の原稿を書いていると、かなり著名な俳諧師でも、その略歴すら分からぬことがあり、また思いがけないところに、思いがけない俳諧師の資料の存在を知ることがあって、落胆したり、嬉しかったり、貴重な経験ををした。その辞典原稿締切後に、作業の助手をつとめてくれた宮脇真彦氏から、次のような原稿が届いた。

森田友昇ゆうりた（天保五年（一八三四）三月十六日、森田与八の二男として武蔵国福生村（現、東京都福生市）に生まれる。本名森田太四郎。嘯月庵と号した（『横浜地名案内』）。友昇は、はじめ在村の俳人、福泉舎友甫に俳諧の手ほどきをうけ、後に江戸の宗匠・富所西馬に入門して俳諧の修業をつんだ。その後、横浜に居を移し、明治八年（一八七五）、『横浜地名案内』を著している。明治十二年、友昇四十六歳の時に、榎本星布尼から三世榎本井之へと受け継がれてきた松原庵の四世を嗣いだ。同年晩秋に版行された『浅川集』はその折の記念撰集である。本書は横浜の儒者・平塚梅花、女流文人画家・奥原晴子がそれぞれ

序・跋を寄せており、友昇の交際範囲の広さを窺うことができる。明治二十七年（一八九四）友昇は行脚の途にたまたま客死した。享年六十一歳。

私はまだこの人の作品は読んでいないが、松原庵を嗣ぐほどの人なら大したものであらう。松原庵は白井鳥酔（明和六年没・一七六九）を祖とする名庵で、二世の星布尼は女流俳人として卓越した人であり、白雄にもついている。彼女は文化十一年（一八一四）八十三歳で没した。

森田家には夥だしい祖先の蔵書や短冊等が所蔵され、成城大学教授尾形仍氏により調査が行なわれ、宮脇氏はそのお手伝をしたのであったが、その仮目録を見てもその数量の多さに驚かされる。やがて公共図書館に寄贈されるそうであるが、この地方の一大文化遺産となることは間違いない。

由來、三多摩地方には俳諧師が多かった。私の師根津芦丈翁の俳友であった井草麦雅氏もこの友昇の門人で、芦丈著の『この一路』には麦雅氏と巻いた歌仙が何巻がおさめである。この麦雅氏も昭和三十七年一月に没した。芦丈翁は悲痛な追悼文を『山襖』二号に書いている。

「麦雅翁、梨花女とも一月二十二日死去廿四日葬送す。と坂本素若氏よりの悲報に驚く。麦雅翁は半身不随の身にて、同庵に先立たれ淋しき数年であられた。云々」と続くその文章には、芦丈翁が心友麦雅氏を憶う真情が吐露されて、読む人の心をうつ、芦丈翁は常陸の成島梅路氏を相手

に戦時中、十百韻を作っておられ、その往復の途次、必ず八王子の麦雅氏の所に一宿されたのであった。そう言え、この麦雅氏の弟子高橋香吟氏は青梅の人であったが、この香吟さんは都心連句会のメンバーになっておられたので私もたびたび御一座した。温和な、しかし連句は達者な御老人だったが、その方が麦雅氏の弟子であり、さらにたどれば森田友昇の孫弟子になることは、つい最近、宮脇、杉内の両氏により聞いて、人の世の広くて狭いことを痛感した次第であった。またさらに、麦雅氏の計を芦丈に知らせた坂本素若氏も五乳人の何世かにあたり、十余年前、私は杉内氏に連れられて、その家をお訪ねしたことがあった。素若老はその時病臥しておられ、奥さんが看病されていた。間もなく没くなられたが、そのあとはどうなっていたことだろう。奥さんはとても俳諧に興味をもたれる方ではないように思われたので、素若老の蔵書などもすべて散失してしまっているに違いない。こうして明治以来の俳諧師が一人没する度に、貴重な俳諧資料が闇に消えて行くの

は残念である。

三多摩地方は既に述べたように俳諧の盛なところであるが、東京の近郊だけに、その変化も殊更に急激である。森田友昇の場合は、その子孫に具眼の人があって助かったわけであるが、大部分は、この文の冒頭に書いた高崎の方のような人が多いに違いない。そのような場合、各市町村の公共図書館か、あるいは東京の俳句文学館あたりで引き取って整理していただけないものだろうか。俳句文学館の書庫にもぎっしりと俳書や俳誌がつまっていて、余裕のないことは分かっているので無理は申せないが、しかし、考えてみると俳句のいわば祖である連句を無視しては、俳句の本質に迫ることは困難であろうし、文学の研究は段々、こちらの方へ進んで行っているように思われる。別に俳句文学館のみに限らないのであるが、あるいは俳句文学館と並んで連句文学館の必要性が生まれて来るかも知れない。その時、資料が無いでは済まされないから、今からその準備が必要であろう。

井草 麦雅

杉内 徒可

八王子の寒香園井草麦雅は大正、昭和にかけて全国的に知られた連句人である。八王子市の戦災に全作品は烏有に帰し、今日まともって見られるものは僅かに喜寿祝に第一

句集として昭和三十一年六月松原庵友昇居士社刊の『聲音』（B6判42頁）あるのみである。

麦雅は明治四年頃群馬県高崎に生る。本名仁藤治。村を出て八王子市内のそばやに奉公、やがて勤めた店が繁昌して人手が足らなくなると、故郷から働き者のいとこの小倉常吉を呼んで共に商売に励む。麦雅はのち独立して中央線浅川駅（現在の高尾駅）近くにそばや「当利家」を営む。

私は麦雅の連句が知りたくて、八王子市追分の大きなそばやさんに常吉氏を訪ねたのは昭和四五年八月一日だった。

「お前は俺のように連句をやってはいかんと云われましたので連句の事は何もわかりません」と常吉氏は云う。常吉氏も麦雅について店を持ったが、本業一筋に打込んだので今は立派なそばやさんになっている。麦雅の当利家はふ

虫 沈

高原のコロナの下の虫沈む

ひよろ／＼草も月前の色

露臭き石鍬拾はん人借りて

咽喉うるほす水筒の酒

エネルギーためるも翌の備へなり

風鎮ゆれてかほる松籟

智照尼は昔し蘇小の風炉手前

忍ぶ恋路を泣されて聞く

ゆくりなく更ける地階の灯の洩れて

誰か敷き捨てし菴一枚

魚籠浮く風の和らく歌もなし

蜃気楼見し幸を日記に

公用の恩典旅行花かけて

温泉の香流るゝ欄のエレジー

水源に慈悲心鳥の夢かすれ

折れて本意なきピッケルの嘴

月過ぎの北アは雪を待つばかり

井草麦雅

根津芦丈

成島梅路

吉岡梅游

丈

雅

游

路

雅

丈

路

游

丈

雅

游

路

雅

るわずやがて廃業してしまったという。麦雅没年が三十七年一月という事もその時知った。

その帰り道、聞きながら尋ね当てた当利家跡はスーパー

マーケット「高尾ストアー」になって客が立こんでいた。

それから同じ月の廿六日麦雅の子息井草述郎氏を林野庁

経理課に訪ね、宗匠帽を被った麦雅の写真をみることに出来た。

桂は匂ふ露の雫りに

神嘗の祭りを修す簫晴れて

沓軽／＼と東道の衛士

笹につけてふる程の酒香も高く

砂金の光る多摩の初恋

愚かなる身は思ふ事多かりき

年の夜の鐘煩悩や消す

雲蹴て先頭犬はエスキモー

隠れることも知らぬアザラシ

仮千本汐息き風に梳り

青瓦朱柱の亭に酔伏し

銀盆に等しき月を仰ぐ夜に

荷風の提げし籠の良寒

杭と云ふ杭に鴉の川岸の秋

田圃こんなにいなさ荒せし

わたましに姫金神の曆繰る

よき陶も出ぬ窯に愛着

雨や風七日に足らぬ花なりき

舞ふ折鶴に注ぐ春光

丈

路

游

丈

雅

路

游

雅

丈

路

游

丈

雅

路

游

丈

雅

路

連句の読み方・味わい方(五)(完)

—「木のもとに」の巻—

東 明雅

唯四方なる草庵の露

一貫の錢むつかしと返しけり

碩 水

(現代語訳) 方丈の草庵に住むこの主は、人から受けた錢一貫文の喜捨さえも煩わしいと言って返してしまった。

(付心) 起情の句、前句は人情無しで、露の置いた草庵だから、その住人は無慾で恬淡な人物を思い付いた付け。

「草庵ヲ兼好ガ栖トミタル也。兼好或年頓阿法師ノ許ヨリ錢借シコトアリ。カ、ル面影ニナシタルナリ」(暁台)の故事を念頭にした俳の付けでもある。人情自、あるいは自他半とも見られる。

(付味) 中世の草庵に住む人たちの清らかな気持が、前句の露と移り合っている。

(補説) 打越は人情無しの句で尾花が原の風景のみであったが、この句で人間が登場したので一応の転じは付いている。しかし、この偏屈な隠者氣質は、27・28の句において

て連想される人物とやや似ている点がかかる。この兼好と頓阿の故事は、頓阿の「続草庵集」にあり、兼好が「よもすゞしねざめのかりほたまくらもまそでも秋にへだてなきかぜ」と詠み、「よねたまへ、ぜにもほし」の詞を沓冠の折句としたところ、頓阿が「よるもうしねたくわがせこはてはこずなほざりにだにしばしとひませ(よねはなし、ぜにすこし)」と返したというのである。内容はいささかこの句の場合と異なるが、曲水は草庵の語から「続草庵集」のこの逸話を思いついたものであろう。さらに、頓阿が送った「ぜにすこし」を一貫位の錢なら仕方ないと兼好が返してしまったと解することもできるが、そこまで穿鑿しないでもよい。因みに一貫は錢一千文。大した金額ではない。

一貫の錢むつかしと返しけり

医者薬は飲まぬ分別

水 翁

(現代語訳) 人からの援助は煩わしいと一貫文の銭は返した自分だ。病気になっても医者薬など飲む気はないのだから。

(付心) 其人の付け。人情自の句。

(付味) 前句のいさぎよい内容、表現に対して、付句の内容・表現ともにびしりと言い切った、いわゆる響きの付けである。

(補説) 草庵的雰囲気打越から三句続くとも見えるが、この薬を飲まぬ人は世捨人とは限らぬから、その難はのがれるであろう。この句も兼好の俳(彼が伊賀国田井の庄の草庵で病気になり勅によって典薬が派遣されたが、これを受けなかったという故事が園太曆にあるとされてい

る)と見る説もあるが、それでは全く三句の転じがないことになる。

医者の薬は飲まぬ分別

花咲けば芳野あたりを欠廻り

水 翁

(現代語訳) 健康な体に医者薬は不用と心に決め、花が咲くとじっとしてはおられず吉野あたりをかけまわるのである。

(付心) 其人の付け。人情自の句。春の句。

(付味) 前句の医者薬を飲まぬ人を元氣一ぱいの人と見立替えして、芳野山中を駆けまわる健脚の人としたのは、近すぎる位よく付いている。

(補説) 打越が隠者で偏屈な人であるのに対して、これ

「イカルス」の夢・東京新聞

木々の芽に雫のひかりかかりけり。これはドイツの俳人ギョント・クリンゲの作。▼クリンゲ氏(七十五歳)はハイクを書き始めて十八年、一日も欠かさず朝星夕と最低三句は詠むという。前掲の句は最近、永田書房から出版された第五句集「イカルスの夢」所収の一七〇句の一つ。訳者は加藤慶二・筑波大学助教

虚子編『新歳時記』を基にドイツ語版『歳時記』の編さんに当たっており、一九八一年に西ドイツ政府から文化交流の功労者として連邦功労十字章一等を受けている▼翻訳されたハイク、あるいは外国語で書かれた短詩型ハイクはもはや俳句ではない、などといわれる。確かに俳句の交流には自然、風土、言語、文化の相違が大きな壁になっている。が、その壁を乗り越えて、近年、米英独仏その他の諸外国でハイクが盛んに愛好されている▼たとえ外国作家の作品が俳句とは別のハイクであるにせよ、俳句が外国で多

様に変容しながら新しい三行詩を生み出しているのはまことに喜ばしいことだ。クリンゲ氏が句集のあとがきで「ハイクが私の新しい生活のリズムとなっていて」と言うように、案外深いところで文化交流の火花がとび交っているのかもしれない▼俳句について正しい理解を促すために作品の外国語訳や基本的な手引書を出版して外国の求めに応ずることが必要だ。この国際化、情報化の時代に「外国人にはしよせん、俳句はわからない」などと独善的、消極的な態度をとることがあってはなるまい。筆洗61・4・20より

は人一倍元気で賑かなまた華やかなことの好きそうな人柄を偲ばせる。前句を中にして自ら静と動、陰と陽の転じが鮮やかである。

これまでの句順をここでかえたのはすでに珍碩は初折の花を詠んでいるからで、これまで名残の表の月一句しか景物を詠んでいない曲水に譲ったのは当然である。

花咲けば芳野あたりを欠廻り

蛇にさゝるゝ春の山中

碩 水

(現代語訳) 花が咲くと芳野のあたりをかけまわり、山の中で蛇に刺されたことであつた。

(付心) 其人。人情自の句。春の句

(付味) 「欠廻り」という言葉のもつ野卑だが飄軽な響きに、「蛇にさゝるゝ」はおかしみのともなつた位の付けである。

(補説) 同じ人情自の句が三句、33も自の句とすると四句並んでいるが、この句は特に軽く、おかしみがあつて転じが利いている。この一卷、ことに前半が古典味が、強い。ため、この挙句の軽み、ユーモアがとてもよく利いている。

この一卷を通観するに、表六句は発句の花見の賑やかさが脇句で一層駘蕩たる気分となり、晩春の長閑さが溢れている。それが第三で一転して、虱を掻きながら歩く旅人の憂鬱さと変わり、その気分が、鞆(藁の肌)の気持悪さに通っている。第五の月の句は丈高く折端は俗にくだけで、序の段として温和しい中にも調和あり変化あつてよい表ぶりである。

裏に入ると、裏移りの三歳駒の凜々しさが、一転して雨の物憂さとなり、入込の温泉の雑沓から、恐ろしい山伏を出すなど、前句に調和しながら、打越からは一転する妙が尽くされ、それが恋句となつて、物喰えと言われる町人の娘の態が、月見の船の景色と変わり、秋風の波の音の恐しさから、白子若松という調子のよい気分のよい地名に一転して、秋から春への季移りが見事に、「千部読む花の盛りの一身体」という釈教と花を結んだ名句となり、ついで「巡礼死ぬる道のかげろふ」の無常となる。このあたりのおもしろさはまさに絶妙で、神品といふべきものだろう。破の二段の折立は「何よりも蝶の現ぞあはれなる」と、ロマンチックな幻想は、まるで現代詩の一篇を見る思いである。それから、王朝的な恋となつて、裏の恋との変化を持たせ、紀の関守を出して劇的な効果を出した。それからはげ頭でユーモアを出し、双六の目から憎まれてまでは俗な調子が続くが、この辺りはもう、急の段を意識してのことであるうか。名残の裏から草庵に住む人、そしてその情が写され、一転して医者薬も飲まぬ達人な男が吉野の花を訪ねて、蛇に刺される軽みと滑稽で一卷が終る。序・破一段・破二段・急の四段階と見れば、序・破一段は完璧であり、破二段でやや渋滞と重複を感じるが、急ではまた見事に巻き納めている。名残の表にすこしごたごたした人情句が続いている外は、すばらしく古典的で典雅であるとともに、卑俗な軽みも十分盛りこんだ、芭蕉の作品の中でも、有数の傑作と言ふべきであろう。

春や昔

東 明雅捌

春や昔十五万石の城下かな

路面電車にまよふ芽柳

隣より小鮎の籠の届き来て

湯煙りの中子を洗ひをり

地鎮祭ほろ酔ひのあと月澄める

眠られぬまま虫の声きき

林檎の香セブンティーンの恋に似し

コートにはずむ彼のラケット

母の日の母の真白き割烹着

のつそりとゆく車屋の黒

厄払ひ四辻うしろふり向かず

嘆漬やまぬ冬月

大空にハレー彗星観覧車

すねて逃した男口惜しい

耳元でお手をどうぞと囁かれ

餌さへやれば寄つてくる鳩

物置の棚のつくろひ老一人

先行き不安保険増額

花よりも坊つちゃん団子頬ばりて

臍に育つていれぎの里

昭和六十一年三月二十三日

於 松山子規記念館

子規居士

良美

和子

律子

一秋

惠依

和依

依美

秋律

秋和

和秋

秋和

和秋

秋和

秋和

秋和

秋和

秋和

秋和

秋和

秋和

秋和

東 明雅

連句懇話会四国大会の主催者鈴木香山洞
さんから、鄭重なる御案内を受けたので、
三月二十三日羽田九時五〇分発の飛行機で
十一時すぎ松山到着。途中で食事を取り、
十二時半子規記念館に到着。春山洞氏に挨拶。
何しろ松山は連句もメッカで参加百九十
余人にはおどろいた。二十余席の一つで
脇起り「二十韻」。四時ごろ終って、空港
に行ったら、東京は雪で欠航。急抛大阪に
廻り、東京駅についたのは翌日午前五時で
あった。同行された式田さんは一泊された
ら、次の日は快晴だったそうで、人間は平
素の所行が大切なことを痛感した。しか
し、帰りの同行はわたしとおさんで、また
「二十韻」をやりこれも結構楽しかった。
春山洞さん、お世話になりました。

吉野紀行

秋元正江

新幹線が八時三〇分にすべり出すと席の前と後から発句がまわり二十韻がはじまる。

檀原神宮乗り換えで、下市口駅に着くと、「いがみの権太の墓」がこの付近にあるとのこと、はや義経千本桜の世界に入りこんだようだ。今宵の宿、竹林院群芳園に旅の荷をおろし、バスで金峯神社へ、杉木立の日矢の中をつづれ折りに登る。途中すれ違う車にのせた吉野杉の切口は鮮やかで地に触るる迄にのせている。我々が名付けた跳ねバスは天井の所々にガラスをはめて桜が見られるようになっていたがまだそこ迄は桜がひらいていなかった。金峯神社で下車、靈験あらたかな聖地で黄金の埋蔵する補陀落浄土とのことである。とくとくの清水で、これよりの吉野紀行のわが耳を洗ひ口をすすぎで西行庵へ。岨道を歩くとやや平地

となり庵がある。この辺の奥千本は花は未だである。

宿に戻り夕食後の二十韻の捌きはアミダくじできめ、食膳には吉野葛のくず切り鍋、吉野の鮎、ゆば、筍、莫大海。この莫大海は千町さんに何うと、中国四川省の柏樹の実を乾燥したものを戻したとのことである。二十韻は十一時に巻き終る。

子報通り朝からの小雨、水分神社へ朝食迄の予定で有志が出発、老杉の急坂の途中に小さな祠があり雨師観音である。夢違観音とも猿観音ともいうこと。郵便配達のパイクの人の槍笠が印象的。

途中ふりかえるると山々は、大和絵さながら、又墨絵のたらしこみのようでもあり、近景に桜、きぶし、しだれ梅、その間を緑の濃淡が埋めてここから見る吉野の町はビルも花に囲まれて調和を破っていない。横川覚範の首塚を背にシャッターをきる。水分神社の楼門は修理中、水分は水を分配する神からみくぼり、みくまり、こもり（子守）となり安産

の神となった。本居宣長は子守神社によって授かったとのことである。

要害の地であり、馬の背のような町並に軒をつらねているのは、吉野建といわれる崖造りである。一、二階が道より下にかけて出されており、三階が普通の平屋と同じかたちなのである。水分神社の神主さんのお宅の電話をかりることになり、玄関を開けておとなうと、奥様が洗濯物をかかえて崖下の一階から戸を開けたまま上ってこられた。その戸口が花明りして、丁度花の中から現われたようだった。

朝食後、出発前にあわただしく天皇の泊られた部屋を見学、枝垂桜、山桜の古木の回廊からの眺めはさすがすばらしく、泊り客はすでに発つた後で、檜の風呂からは湯気があわあわと花に消えていった。車に分乗して、蔵王堂、吉水神社、勝手神社、如意輪堂へと廻る。一休庵にて昼食。昼食のあいまに二十韻一卷。三時一〇分吉野発の近鉄で帰京の途に。京都からの新幹線で又二十韻。

脇起り 二十韻 吉野にて

吉野にて桜見せうぞ松の木笠

心浮き立つ風光る駅

めかり時魚拓作りにせい出して

棚に並びし古文書の筐

軒先の新品バイク照らす月

藪虱とる背に近づき

痴話喧嘩意地を通せばうそ寒く

在日ながき神父着ながし

飼主によく似た犬はあご長く

いづれのおおん時の話ぞ

孝行の言葉通じぬ新人類

ビートのきいたエアロビックス

乾杯のビール溢るゝ大ジョッキ

寒月に佇つたは雪女郎

唇は熱くそれより覚へなし

マラカニアンを出でて放浪

奥州は白石といふ国所

名工つくるお湯にどつぶり

わが魂のあくがれ出でて花の山

鶯鳴いて暮るる一日

昭和六十一年四月十四日

吉野に向う車中にて膝送り

二十韻 行く春

行く春やすでに心は花吉野

新幹線は東風よりも疾く

潮干潟貝とる人の声のして

藍くつきりと描くキャンパス

黙礼をくり返しつつ帰る月

名残の蚊帳に二人寝しこと

かりん酒を作る頃なり巴里に来て

頼すりよせし馬のたてがみ

名舞台つとめて余暇に名句あり

鉄砲仕掛の葱鮪鍋など

竹垣を時折ならず北ならひ

高層ビルの窓に書く文

わけありのバーのママの訪ね来て

いづれを見ても過疎地育ちよ

乗りかへて又乗りかへて月暑し

ステンドグラス火蛾の舞ひ飛ぶ

間延びして音が鳴り出す蓄音機

灰吹きたゞき爺の念仏

鏡割る落成式に散るさくら

うらゝになびく先達の旗

昭和六十一年四月十四日

吉野に向う車中にて膝送り

翁 司 秀 哲 亭 孝 明 隆 千 杉 孝 正 麻 淳 和 麻 正 孝 千 杉 隆 徒 翁

司 雅 明 徒 翁 秀 哲 亭 孝 正 麻 淳 和 麻 正 孝 千 杉 隆 徒 翁

二十韻 葛菓子

正江捌

葛菓子の店にしろやま桜かな

訛のどかにバスの券売り

春の蠅疲れた足を投げ出して

違ひ棚には到来の壺

お月さんさへ寝やしゃんしたとお里さん

青無花果に似たる恋あり

竜神の裔の部落の懸煙草

傘一本で追ひ出さる僧

エスカルゴ銀のフォークでお品よく

クسنクスンとなつく野良犬

浅草は朝顔市のこの暑さ

酔うたついでにごねる碁仇

パソコンでテクノストレス重症に

シャーツ洗つて男三十

新幹線玻璃にくちづけ凍つる月

未来永劫今を抱きしめ

漸くに元氣恢復紫電改

パサリとはねて鯉の顔出し

つくづくと銭に無縁の素花見

木の間がくれにゆするふらここ

昭和六十一年四月十四日

於吉野竹林院群芳園

二十韻 桜千本

千町捌

千本の桜尋ねて旅の宿

此処かしこ聞く谷の鶯

レセブション春着の人の軽やかに

莫大海を添へしお刺身

月光に定紋入りの棟瓦

ばった踏んでも気も付かぬキス

コスモスは風に乱れて破戒僧

南朝廷の夢追ひしあと

ゆらゆらとうーぱあるーぱあ泳ぐ水

ソフトクリーム自転車で売る

逃れ来し街騒遠く火蛾の舞ふ

髭を取つたり髭を付けたり

沙は沙君と見りやこそ波は波

シャガールの絵は愛に浮上す

鉄塔の尖りに氷輪冴ゆる時

咳込みながら直す遺言

サラリーを総て注ぎ込む猫屋敷

本吟醸酒棚に半分

花吹雪髪に項に背の子に

苑を巡りて惜春の詩

昭和六十一年四月十四日

於吉野竹林院群芳園

千町捌

千町

隆秀

麻子

徒司

みづ

哲

子

秀

子

秀

子

司

司

町

司

哲

司

秀

哲

子

司

子

賦吉野二十韻 みよし野や

二十韻 鶯

みよし野や雨暖かく頬をうつ

杉の谷間に鶯の鳴く

わか鮎の小ぶりの皿に蓼添へて

座蒲団をふみ大部屋の客

月の夜に狐化かして蔵王堂

秋の静寂にひびく小鼓

うそ寒のはねバスに手を握り合ひ

葛菓子に文忍ばせて苞

今日はしも脳天大神段下り

あづさ弓あと雪の扉に

陀羅尼すけ売る店婆の集ひゐて

宿のゆかたはおひきざりなり

新幹線修学旅行の稚な顔

窓のガラスに映る口紅

八咫烏地酒熱燗月あかり

竹林院の更けて行く宴

手漉紙忍ばせてゐる懐に

乙女十六慕ふ静は

水分に飾りのこせし花の興

鶏関つぐる春の群峯

昭和六十一年四月十五日

於吉野一休庵

鶯や水分の雨降りつゝのる

蔀に近くゆるゝ芽柳

めかり時ランチボックス賜はりて

小学唱歌師弟合唱

月天心いささかの酔心地よく

茴香の実の笹にこぼるゝ

男猪しとめくくりて山下る

弁慶玉虫恋のはかなき

おみくじの通り待人あらはれて

信号変る街の十字路

文音に頭痛肩凝り按摩鍼

宮城館に今日も琴の音

羅を十六歳の乳透けて

ジャズもダンスもうれし夏月

ゆつくりとつむりゆるむはさびしかり

大鯨鯨は逆吊りなり

出迎へのペンツ黒タムシの唄

愛犬つれてジョギングの朝

ひともとの花しだれ木を瓶に挿し

お手玉あそび子等のうらゝか

昭和六十一年四月十五日

東京に帰る車中にて膝送り

孝子

みづゑ

和子

麻子

貞子

正江

淳子

千町

隆秀

杉亭

哲

徒司

明雅

ゑ

孝

和

貞

秀

江

町

堅香子と桜

かたくり

かたくりやあるかなきかの雨の粒

やや低く飛ぶ野辺の初蝶

ふらここをゆする親子に犬の来て

晒し飴きる音の軽やか

月まつる帝釈天の広縁に

茜の裾をかへす秋風

馬肥ゆる肥り肉なる彼を恋ひ

バチカンで賞つ最後の晚餐

裏切りの胸の痛みを抱きて生き

アイドル歌手の人氣短かし

翹透きてうすば蛭蝸灯に迷ひ

踊り疲れて汗だくの月

飯食つたらすぐに出来るよと父が言ひ

天婦羅ひとつ譲りたる仲

ゆきずりの旅のひと夜を胸にひめ

アムステルダム塔のみぞるる

別珍の足袋はいて寝る老二人

健康法は気にしないこと

山の辺の花雪洞に足をとめ

ミニサンクチュアリ鶯の鳴く

明雅

徒司

杉亭

孝子

正江

和子

あかり

K

千町

清子

雅

司

K

り

孝

江

和

町

亭

清

清

もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井

の上の堅香子の花(万葉集巻十九、大伴

家持)(群をなすおとめが汲みささめく、

寺井のほとりのかたかこの花よ)

堅香子の花はかたくりで、ゆり科の多年

草。四月中旬ごろ頂に紅紫色の花を下向き

につける。その鱗茎からはかたくり粉を採

る。

信州の山の中でも時々咲いているのを見

ることはあったが、千葉にその群生地が残

っていることは知らなかった。柏の逆井に

住むA・C・C仲間の下鉢清子さんの御案

内で、A・C・C有志で見にゆく。小雨の

ため満開とまでは行かなかつたが、久しぶ

りに可憐なその姿に接しうれしかった。途

中ですぐ二十韻一卷。それから午後は同市

光ヶ丘のうどん屋さんで中食のあと、式田

和子さんのお世話で有名な広池学園の桜を

見、同学園会議室で土地の方を交えて四時

まで二十韻三席を興行した。

東 明雅

春特有の細い雨が降りみ降らずみ、それ

はそれなりの風情の中の四月十一日、朝日

カルチャー連句教室の方々が、柏市内のか

たくりと桜を見にお出でになった。遠く筑

波大学からの加藤慶二先生のお顔もある。

柏駅に全員が揃うや否やもう始められた二

十韻の付け直し、明雅先生の発句は、

かたくりやあるかなきかの雨の粒

かたくりへの道、歩きながらも付け句を

考える熱の入れ様に、先ずは「かたくり」

の巻は昼食のうどん屋でめでたく満尾。

下鉢 清子

広池の花

式田和子捌

なんじゃもんじゃ

中田あかり 捌

かたかごや

下鉢清子 捌

集ひ来て広池の花に会ひにけり

和子

かたかごや葛飾野面との曇り

土ほんのりと匂ふ春郊

千町

仰ぎみるなんじゃもんじゃの芽吹きかな

清子

新調の合のコートを取り出して

杉亭

あかり

明雅

ロングサイズの煙草くはへる

英子

孝子

正江

月待ちて詩歌管絃たけなはに

和亭

K

洋子

籠に溢れる千草八千草

町

K

K

独り酌む酒は名代の新走り

亭

徒司

清子

シラノもどきに恋の手ほどき

町

孝

江

オニヤンコのうひうひしさが可愛らし

英

K

江

路上にひたとつきし血痕

亭

秋

江

那谷寺の面相歪む夏の旅

同

司

雅

ほっと一息頼むコーヒー

町

孝

ヒ

振るチェツカ轟音瞬時走りすぎ

同

同

雅

寒月背に尋ね来し女

英

景

洋

厨辺に逃げつつなはず乱れ髪

和

孝

同

虫の居処悪き此の頃

英

司

江

水車小屋はてなき苦役世はめぐる

町

孝

清

入れ歯ない人噛めぬあたりめ

英

司

ヒ

小手かざし仰ぎて見やる夕桜

亭

景

江

轆なき渡り霞む山々

英

り

雅

花の山やや遠くして試歩の径
あをぬたを喰ふ昼ののどけさ

明雅

(第三回) 沙羅の会

昭和六十一年二月十九日
於 京橋区民会館

春の街

馬場彬風 捌

春の雪

馬場東夷 捌

大雪になるやも知れず春の街
 佇みて見る雛を売る舗
 手から手へ子猫一匹貫はれて
 八角時計振子ゆっくり
 カーテンの隙間より射す月の光
 居眠りながら新薬を打つ
 丹念に初獺の銃磨き上げ
 週休二日持て余すひと
 宇宙旅行狭い地球にゃ住みあきた
 男と女入口は別
 ひるがへるチャドルの中の瞳が笑ひ
 全部の指に指輪ちゃらちゃら
 円高で金の値段が下がりがりつつ
 神輿かつぎに急ぎ行く坂
 涼しげに爺・父・孫と月を賞で
 上り框に届く夕刊
 湯のけむりほのかに花の隠れ里

彬風 孝子 貞子 麻子 弘子 徒司 遊弘 貞遊 孝真 遊麻 孝麻 遊麻 孝遊 孝

三味の音の流るる路地や春の雪
 梅ほんのりと浮ぶ軒の灯
 桜鯛男が下げて厨房に
 框の猫をそつと追ひやる
 大いなる月前山に出でそめし
 ひよんの実吹いて子等とあそばむ
 爽かに訪れる影光悦寺
 恋知らぬ顔恋知りし顔
 ちらちらとスカートの裾割れる服
 ベビーホテルに車走らせ
 わっぱ飯かっぱ味噌汁かっぱ酒
 单身赴任膝を抱きをり
 一病をかかへて細き冬の月
 輔祭の鉄屑のなか
 マルコスさん票すりかへて当選す
 Lのサインをやめぬ群衆
 夢のごと吉野は花の真盛り

東夷 瑞枝 明雅 和子 正雄 正江 啓世 雅子 枝雅 江枝 江雄 子雄 江子 雄江 子雄 雅子 雅

こごみあしたば天婦羅にする
春愁の伎芸天見つこの寺に

デフォルメをして描いて下さい

マルコス氏勝利宣言インタビュ

知らぬ振りしてみんな知つてる

失ひし硝子の靴のみつからぬ

馬賊芸者で過ぎし半生

乳ばなれをせぬ間に髭の生え出して

裏が真赤な黒きマフラー

碧落に鳴き交はしつゝ鶴渡る

泡立ち著き月の海峡

さり気なき一期の握手秋風裡

放屁虫の臭ひしみつく

半纏に天秤棒を軋ませつ

さしつさされつぐい呑の酒

マンションの四DKもひろからず

手慣れ藜の杖を友とし

花盛り三輪の近道訪ね来て

石の上ゆく若鮎の影

明

孝風司弘貞遊弘孝遊弘麻孝雅遊司風貞雅麻

春もたべたし柿の葉の餅
抱卵期まるやかにあり太柱

スニオン岬入日美し

鞭鳴らし獅子に火の輪をくぐらせて

生甲斐模索のびぬやり甲斐

よな虫の米櫃のふち這ひあがる

水屋の旗染めるTシャツ

擦り寄りて髪の匂ひのいとほしく

逢瀬東の間まさるとときめき

湖底には沈めし鐘のそのままに

悪童さがす鴉の早贄

名月の想ひ出たどる七十年

引手に厚く障子張るなり

美術館むかしは繭倉なりしとか

ボートひきあげペンキ塗るひと

閑伽桶のま新しきが悲しくて

一人静に木漏日のさし

弟を叱る姉あり花の庭
合格を知る風光る朝

世夷雄子枝江子世子江世雄枝江子枝世江世

落第の娘は毎日を昼寝して

シグソー・パズルに内中で凝り

ひと揃ひ和蘭陀うつし向付

病の如く通ふ露地裏

愛つなぎ難くひたすら毛糸編む

男と女肉枯るゝまで

屋上に季節はづれの植木鉢

ズーム・アップでマラソンを追ふ

中流意識でみんながかかると金満症

味噌匂ふなり月の出る頃

老父のいそいそかむる踊笠

蛸の中閉ざす詩の本

ひよんの実を吹きつつ下る三の丸

背広にみんな赤い羽根つけ

おじさんの万年筆を欲しがりて

なぞなぞ遊びつぎつぎと出す

更くるほど花の明るさ冴えて来し
母衣を残して山鳥の消ゆ

両隣留守を頼みて伊勢詣

「暮六つ」と云ふ店でいつぱい

その男ぼそと食みをり豆落雁

冬薔薇溢るマジヨリカの壺

青空に熱気球浮く綱とかれ

誰も知らない誰も見えない

子産み石抱きし御利益あらたかに

キヨスクで買うアパマン情報

往来に排気孔出て洋食屋

父の背広を娘着くづし

月あかりパフォーマンスのまっさかり

力士幟の鮮やかな色

御当地も今は名残の虫をきく

ぼけの媼の達筆の反故

お疲れにとつきワイン召上れ

にぶく光りて銀の灰皿

爛漫の花を映せる大玻璃戸
土産に選ぶ栄螺 蛤

子

同

同

枝

遊

遊

子

遊

枝

遊

枝

遊

枝

子

遊

子

遊

連句入門

中公新書 508号
価 五〇〇円

猫

蓑

永田書房
価 二三〇〇円

著 雅明 東

芭蕉の恋句

岩波新書 91号
価 三二〇円

好色五人女 好色一代女

小学館
価 一九〇〇円

絶頂の城

付勝練習歌仙

東明雅

投句締切

7月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鶯のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

啜る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

7 通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままならず

ぱりぱりと炒るちぎり莧蕪

角乗りを終へて筏師まづ一献

江悠々と冬靄の中

十三句目

治定 凍てる月ロシアの古都に妻とあり

1 月待つ間馳よぎるを確と見し

蕪村

正江

樺晴

東夷

隆秀

たかし

貞子

昌子

妙子

千町

杉亭

天留子

哲

遊

前句の「江」という字は、どうみても日本の川にしては大きすぎ、やはり大陸の河である。治定の句はロシアとしているが、いかにも寒月の出る場所としても適当である。ただ妻という字が恋句にならないかと心配したが、これは次の付句の付け方で恋句にならないようにすればよいのである。また、留め方が、莧蕪・一献・中と名詞が続いて来たから、恋化があつてよい。人情自他半の句である。ロシアと言う地名が出て、また、世界が一転した。この先、どう変化させるかが腕のみせ所である。1の馳、この巻には生類がすくなく、ことにまだ四足の動物が出ていなかった。馳がちょろちょろと過ぎるのは大河の茫漠たる景と対付的なおもしろさがあつて付味は悪くない。2は一句としてはよいが、前句との付味がいかがか。3は大変苦勞された句である。打越と前句が外の景なので、何とか内に入ろうとされ、留め方にも注意しておられる。4は中国服の連想か。5は去年今年の感慨と前句と大自然の景が融合して、付味がともによいがやはり留め方が平凡であつた。6もよく考えてみると、冬の室内で中国風の月を出そうと苦心された様子がよく分かり、留め方も注意しておられる。7は畏でやはり四足のイメージを出してそれを中心に寒月のきびしさを出しておられる。ただ、打越が凝った句であつたから、今度の付けはあまり凝らない方がむしろよかつたかも知れない。その点、8・9・10・11にも共通して言えるところである。8の馳は同じ馳でも外国的な気分をもつ蝦夷馳で、それが獲られ、吊り下げられている点凄愴さがあ

21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2
 べーチカの烟の中を上る月
 凍鶴の一声鳴きしあとの月
 寒月下捕虜の時代を思ひ出す
 月の下かちごも着て巴里にあり
 月暗し遠く吠ゆるは狼か
 撃鉄をおこし月下の貂を待つ
 ぼうと炎ゆ狐火の暈月の暈
 利鎌なす月に狐火また燃えて
 枯枝に昼月淡くかかり居る
 寒月も今日ほうるみぬ葬終へて
 狩宿の高窓洩るゝ月明り
 凍月を撫みとらんと猿の手
 暈月のパリー狐に顎うづめ
 月明り吊り下げられし蝦夷颯
 畏掛ける凍れる背に刺さる月
 妒を囲み姮娥のことも口の端に
 去年今年旅にしあれば仰ぐ月
 わが手にて刺繡の服に寒の月
 狼と月の掛軸見て暮らす
 しばらくは寒柝に蹤く月の路地

采女 清之 孝子 東夷 美子 和子 千町 杉亭 天留子 淳子 隆秀 美鈴 智子 美和 竹子 道郎 徹

る。9も旅・地名・四足・月を纏めて手際のよい所がある。10は中国の画題によくある猿猴が水の月を取ろうとする図から思いつかれたのだろう。こんなふざけた句も変化をつける上からはよい。11も打越と気分の変化があつてよいが、留めの工夫が今一步である。12これも景気のよい打越から無常の句へと気分・情景ともに一転しているが、て留めの月はすでに表に出ているので取れなかつた。13これは純叙景の句で、さり気ない所がよい。14・15は期せずして狐火の句である。狐火はやはり日本的なものではないかと思うが、前句に付いていないことはない。ことに15は何か茫洋たる表現が、打越からはよく転じ、前句にはよく付いているように思うが、ともに留め方に一工夫ほしかつた。16はその点、留め方も考え、付味・転じともに悪くない。17は凄愴の気が強すぎて、大打越の気分に戻りはしないかと心配だが、よい句である。18は9と同じだが、9の方が凝っている。19は終戦の時の御苦勞を偲ばれたもの、こんな付けもあつてよい。20凍鶴の声は脇の句の夏鶯の声があるのでまずいだらう。21こんな景もおもしろく、付味・転じも悪くないが、留め方にもう一工夫が欲しかつた。さて、次は雑の句。人情の句が欲しいが、恋句にしないよう注意して下さい。

岡野ひさの嬢 歡迎連句興行

昭和61年4月6日(日)
於 関 口 芭 蕉 庵

マラヤ大学へ二年前赴任された岡野さんが
大任を果して帰国されたので、四月の連句
教室は二歌仙を巻いて彼女の無事を祝した。

花起し

井手櫛晴 捌

燕来て

東 明雅 捌

花起し翼のしゆく嫩き鳥

春の夢覚む二年の後

青き踏む句帖の紙背手擦れして

子供にはやる丸字漫画字

マンションの高みの窓の宵の月

落鮎盛りし今日の食卓

新聞で秋狂言の外題知り

まづ呉服屋で反物を選る

藍縞の浴衣の肩に散る切火

ホームステイのアメリカ娘

連弾のピアノに指の触るる時

櫛晴

ひさの

精光

徒司

彬風

杉亭

隆秀

麻子

蓼艸

麻風

燕来てまた乾坤の新たなり

さくらの蕾ほころびし今日

春シヨール入学式に付き添ひて

ガラス戸越しに顔一つ浮き

月光に未完の塑像命持ち

棗の実にて首飾りかけ

新走り古き長屋に住みなれぬ

隣の音の何故か気になる

くちづけは抹香くさき袖袂

セーラー服を脱げは若妻

擦りよりて心配そうなるマルチーズ

明雅

正江

天留子

きよみ

千町

譲介

哲

采女

江

K

み

詩と国語

井手櫛晴

近頃、俳句や連句に想を得たり型式を借りて、ハイク、レンガと称する短詩を作る外国人がふえた。このことについては、さきに東夷氏が「フランスの連歌」と題して概観している。それには洩れたが、英語で作句する比島人外交官 R・M・サラス氏も

ひびあかぎれに貝の膏葉
月明に水鳥毬のごと睡り

同窓会でしたたかに呑む

禿げ上がる医者と坊主の話合ひ

刀鍛冶場の注連を回して

ドリヤンの香りほのかに庵うらら

渡り漁夫来る北国の町

猫の子の咽喉なでている日曜日

あつと驚く王手飛車取り

宮殿に残りし靴は千五百

蛸焼買つて帰る坂道
ウエストのちよいと気になる水着着て

不倫を隠すビーチパラソル

手の取れた操り人形投げ出され

どこまで続く大根の畑

新装の壁に飾らん夢二の絵

ある日突然ダンブ跳び込む

筆星目指す探査機月を過ぐ

狙ひ定めて初猟の息

矢印を辿りて紅葉の温泉村

蝗袋に手拭の婆

スーパ一の目玉商品なりといふ

金利下降を招く円高
いづくより「旅」てふ香の花の部屋

帰国祝つて放つ風船

香港島をはなれゆく船
我が旅よ月の凍りて十字架に

頬にきびしく刻む風雪

呼びこみはててんがとどどんがどんみ

阿蘇の火振りの神春を告げ

花抱ける人を押しゆく車椅子

だらだら続く遠足の子ら

唐九郎壺掘つて出す四月馬鹿

毒も少しはお菓のうち

刺青もガンの捌きもアメリカで

指一本で相場指図し

かけ抜けてメフィストフェレス夏の街

水盗みつつ人妻も盗る

二年前と違ふところは耳輪のみ

優しさ故の嘘の数々

死病得て顔施といふもはかなかり

文机の足少し不揃ひ

遠き日の日記取り出す後の月

なんきん炊いていとこはとこと

残る蠅網戸の隙を探しかね

新人類にたくすこの芸

ノーサイドひびけ平和のホイッスル

光りをこぼす水筒の水
人も季もうれし日本の花の宿
うららうららに猫と居眠る

江 その一人である。俳句はものの本質を表現
する最高の手段であると観じ、句も押韻す
る上、俳句の音数律に合わせて五七五の音
綴にする凝りようだ。いくら音綴をそうし
たつて七五調のリズムは生れないのに御苦
勞なことだが、それは問うまい。

天 それより比島人が日本の詩にヒントを得
て英語で作句する不思議さである。英語文
化の圧倒的な支配下にあるから無理はない
としても、氏にとっては日英両語とも外国
語、なぜ日本語で作ろうとしないのであろ
う。また、母国語―カタログ語あたりを用
いないのか。十三世紀イタリヤ原産のソネ
ットを輸入した英仏の詩人は外国語を使わ
なかつた。氏は母国語が覚束なくなつたの
か、あるいは詩語として不適當―粗野?―
と見極めたのか。

女 もしそうならば「俗語を正す」意気込み
で奮起一番して貰いたい。プーシキンも芭
蕉も最初から「プーシキン」や「芭蕉」で
はなかつた。それにしても固有の詩想を固
有の言葉で固有の詩型に盛り込めるわれわ
れは恵まれていると云わねばならない。

介 さて、マレーシアはどうであろう。「嫩
き鳥」の見聞を聞きたいものである。

町

哲

介

み

雅

町

江

介

天

江

哲

K

町

女

天

天

第十七回 猫 蓑 会 五歌仙

四月三十日(水) 文京区新江戸川公園松声閣に於て興行 参加者二十八名

松の花 上月淳子 捌 四月盡 米谷貞子 捌 桜 葉 内田麻子 捌

庭石にほろとこぼれて松の花	淳子	野仏の臉おもたき四月尽	貞子	桜葉降りて行末何の色	麻子
しばし聞き入る鶯の声	千町	風にのり来るきぎす鳴く声	啓世	そつとくるみて納む古籬	久美子
鮎膾膳目八分に運ぶらむ	正江	椿餅餡甘くして白くして	明雅	ランドセル新入生の嬉しげに	彬風
隣座敷は団体の客	哲	紺の暖簾は母の手作り	遊雅	精いっぱいにも尾を振る	金一
ひと振りの古刀を月にかざしつゝ	隆秀	湖の上嬉嬉涼しく昇りきし	雄雅	町の月巡りて照らす屋根々々を	久
草じらみつけ猫帰り来る	喜久子	林間学校はや眠る頃	雅	相撲を触れる太鼓聞えて	久
幼なよりかゞみて受くる赤い羽根	秀	お揃ひのTシャツ並ぶ夏衾	遊雅	野仏へ一本さしぬ曼珠沙華	一
左ぎつちよで文を書く駅	喜	ルーペで覗く浮世絵の肌	雅	紫色にぬりし唇	風
BGMの「沈める寺」にすゝり泣く	江	思ひ出し笑ひにはつと氣のつきて	雄	待つ彼を誰とは云へず待ちぼうけ	弥生
伝法肌に秘むる純情	町	気流に乗りて死の灰の来し	遊	風に吹かれて帽子飛びゆく	久
じゆうくくとソース焼そば辛口	江	銭塘江大海嘯のあとしるく	世	閉じこめし管の原子の火が暴れ	麻

窓にはりつくやもり一匹

倫敦塔階登り見る夏の月

介抱泥に厚き礼云ふ

足長の新人類も紺スーツ

野線にらみ握る鉛筆

花吹雪天皇賞を射とめたり

初缸かかる遠き山脈

灌仏会五つ子ともに連れ立ちて

つい引き込まれ笑顔泣顔

ブレーキとアクセルうかと踏み違へ

もつれて何処雪の足跡

熱燗を口うつしして燃えたたせ

簡易旅館の枕へこます

朝風の吹き抜けてゆく副都心

課長研修録巻のまま

嘘ついてこっそりくぐる神経科

夜の帳に魍魎の蠢く

後の月喰ひ残されし栗ふたつ

掛衤かける糸のやや寒

蜂の仔を少年の頃追ひかけし

勲六等を受くる職人

隅田川友禅流しはじめたる

つい手ののびるあと引きの豆

花冷一枚増やす旅靴

あちらこちらに春田打つひと

町 桐雨先生旅をする秋

哲 紅浴いたような酒のむ月の下

江 こつそり洩らす本音たてまえ

哲 葛城は一言主の住める山

同 薬人形に五寸釘打つ

秀 花の下大軒かく男あり

淳 春大根の青き首すじ

江 湯通しをして白子干薄味に

町 九官鳥の婆に飼はるる

秀 病院の待合室は社交場

町 嵌め殺し窓空を映せり

秀 雪女郎じつとみつめて泣して

哲 指切りすれば指のとけゆく

喜 真相は誰も知らない藪の中

哲 蛇が衣を脱いでゐる時

町 うまくって臭くて恐いものはなあに?

江 けん玉上手を自慢する兄

喜 月蒼きベカンベ祭りアイヌ唄

江 稲舟に乗り小犬吠えをり

秀 潜り戸を開けて舞茸届けらる

哲 円高にても食へぬステーキ

江 仕方なく雨傘番組見ること

町 さらばと別れゆく彗星

淳 花万葉陸下御在位六十年

喜 天長地久祝ふうららか

同 東京サミット警備ピリピリ

雅 弁当を自慢してゐる夏の山

子 泉の水をくめば夕月

世 幸ありとリンデンbaum唄ふひと

遊 エアポートに人種さまざま

雄 車窓より散り込む花に旅終る

雅 手より離れて高き風船

雄 陽炎のゆらぐ階段社まで

遊 弁慶思案の間と云ふも在り

世 呵々大笑大正生れ髪白し

遊 ファミコン無くて兎にせがまれる

雅 幾本も糸をたぐりて知る相手

遊 実存主義をつらぬきし愛

同 生きて居て死後の如きの長き日々

雅 パンくず拾ふ雀来てゐる

雄 落葉掃く肩にも落葉降りかゝり

世 柚子浮かばせし風呂あふれしむ

雄 信濃路の峠に残る鎌の月

世 秋のてふてふ羽を休めて

雅 外出にコートをはをるそぞろ寒

遊 演舞場では「ヤマトタケル」を

雅 ほろ酔の友と裏街肩を組む

子 外国煙草自動販売

雄 花冷えに襖絵の鶴舞ひたらず

久 春の名残りの琴をすさびぬ

風

生

風

一

久

生

久

風

久

風

一

久

風

麻

生

風

一

風

生

久

一

風

久

風

久

弥生辰

吉澤てるよ

捌

紫木蓮

速水昌子

捌

弥生辰親しくいとこ集ひけり

てるよ

旧交のよみがへる日や紫木蓮

昌子

棚に下りし白き藤浪

杉亭

鉄瓶の蓋ずらす春昼

和子

小綬鶏の帰る森なく棲みつきて

徒司

畑打の男だんだん遠のきて

天留子

風にのりくる子等の口笛

みづゑ

身も軽々とジョギングの列

東夷

手習ひの硯の海に月の照り

采女

月光の遊べる大河悠々と

弘子

薬味利かせて騒る新蕎麦

司女

柚子の実一つ掌の中

同

重陽の柱に掛かる鬼の面

女

口福の地酒に合ひしにがうるか

夷

寄進瓦に思うひとの名

ゑ

あきた亭主にぼんとつき出す

和

戯れがあつといふ間に真剣に

亭

お互いに欺し欺され齡重ね

夷

男はいつも浮気大好き

ゑ

軍縮会議笑顔儂し

天

とめどなくアイドル歌手の後を追ひ

亭

人類は皆兄弟と言ひしひと

弘

〔赤い酒〕のみ新湯の夜

明雅

ねぶとにもんでつける十葉

和

雪女郎万代橋に出る月

同

山の湯のあふるところ夏の月

夷

土間のいびつに凍る藍甕

ゑ

親猿仔猿枝つたひして

和

〔青淵〕の生家訪ねる人ふゆる

司女

足弱の西行庵をたづねかね

天

后候補はテニス必習

女

ウォークマンにレゲエ・ドゥーワップ

和

ギャロップのたてがみ撫でる花吹雪

亭

故国より移せし花の今盛り

天

軽気球浮く空のうららに

ゑ

鎌の来ない町となりたる

夷

じつと待つ双眼鏡に巢立鳥

司女

銀屏に紋付袴利茶して

和

盲腸とつて食い気旺盛

女

宇宙のロマン語りあかさん

夷

十一面観音さまの大笑ひ

ゑ

雨は降る背で子がなく腹はへり

和

柏連句会

昭和六十一年四月二十日
於 柏市光ヶ丘近隣センター

藤の花

下鉢清子

捌

かぎろひて句座の四卓藤の花

清子

催促棒にすがる姫虻

明雅

風光る駱駝の欠伸うつり来て

洋子

園児の群の名札色々

秋景

陸奥の眠流しも昨日今日

雅景

夫と二人の古酒の酔

雅景

「十三夜」読み返しつつ十三夜

洋雅

嘘つくことの手が好きなの

洋景

ドライバーク腕のたしかな稚顔

雅景

ロスアンジェルス海の真向う

雅景

温泉の数は二千三百
旅に惚けE湯E味E女

クレオパトラとゆきずりの恋

かそけくも匂ふ香水マラカニア

藜の杖に頼る晩年

つらつらと出自たどれば錦衣なり

団平船のひとり船長

波間縫ふ音締め^ナの冴えて月淡く

蓑虫蓑を厚く綴れる

そぞろ寒原^ナ発炉溶け死者不明

お菜のいらぬたきたての飯

耳しいのとんちんかんのなま返事

ママはカルチャー僕は塾行き

花の友旗ふりかざし奥の宮

陽炎のたつ山間の径

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句辞典

101 東京都千代田区神田錦町三ノ七

東京堂出版

連句界の要望に
三年の歳月をかけて
完成した連句につ
ての初めての辞典。
六月末発売

司 首くるる歌手死にいそぐ歌手
亭 もてあます不倫の炎消えやらす

女 冬ばらの奥紅の夢

ゑ 毎日を日向ぼこして暮るる父

司 七味たっぶりかける明雅師

亭 俳諧は虚実皮膜の間にあり

女 大時計鳴るたそがれの街

司 月皓々白き清掛けくつきりと

女 前をよぎりてつと秋の蛇

司 腰まげて嫗手伝ふつるし柿

女 少し濃い目の番茶供さる

ゑ 旅立ちの仕度こまごまとのひぬ

亭 この春裕もらひ嬉しく

よ 花びらをばくり呑みこむ大緋鯉

亭 のどかな庭に遊ぶ子雀

夷 同 夷

天 弘

和 昌

夷 和

天 和

和 天

天 和

和 天

天 和

和 天

天 和

和 天

天 和

手作りの玄米饅頭へそ曲り
御器噺が出てなめる宵々

病室のシーツをかへて月涼し

三千足のイメルダの靴

舌真赤蛇が鐘まく初芝居

痺せたる女形凍鶴のごと

老いたれば般若心経朝夕に

散歩の足をすこしゆつくり

吹きこみて駐車の窓の花吹雪

青き空より急な春雷

穀 雨

井手櫛晴

捌

葛飾野緑育くむ穀雨かな

姿どこやら囀りの谷

新社員訓辞をいとも神妙に

広告気球目の隅で追ふ

釣堀の竿の彼方の昼の月

待ち合はせたる蓮の不忍

ポン引の出没多く誤られ

お稲荷様が座敷神なり

旅立ちに老のしきたり切火して

俳句吟行月に三回

ポーナスで奮発したるテニスウェア

清 雅 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

雅 清 洋

徒 司

ヒデ子

晴

平

平

平

平

平

ヒ

鼻息白く坂登る馬
巴里より電話に乗りて孫生ると
看板娘今も煙草屋

無人駅スイッチバック望の月
新酒の香り庫裡の方から

定年も安らかならず渡り鳥
揺れては止まる峽の吊橋

花めでた六十年の在位とて
杉の古木をめぐる春風

司 平 晴 司 平 晴 司 平 晴

消え残りたる藪の淡雪
春シヨールふんはりと持ち歩むらん

口を汚してたべるあんころ
月の窓方程式を解き終へる

宅急便に匂ふ新綿
秋袷椅子をききませ肥り肉

四十を前に恋句曼陀羅
鹿島鍵白馬不帰岳我庭に

貰ひ手もなし牡の三毛猫
クッキング・スクールはげむ粗大ごみ

酔うて候まづはこれまで
身も皮もひつ剝がしたき大暑なり

我鬼忌に灯す慈眼寺の月
長持石棺口あげ魔女の出て来さう

くるくる廻すたぐり餡なめ
花の下香具師こまでと線をひき

雲雀は宙に土龍土中に
ブランコにセンチメンタリズム揺する

さて何としよう工場閉鎖
政変に暗殺に報次々と

神にさへある貧福の別
へつぽことおかちめんこと終の家

湯婆がはり抱かるるもよく
キムチ漬近ごろまれな冷えこみに

文士の好む香は「妙法」

千 町

正 江

譲 介

精 光

晴 介

晴 光

晴 町

晴 江

光 江

同 光

町 光

介 光

江 光

藍微塵着流しにして肩をふり
櫛齧合はずに過こす半生

一枚の月のべらりと核溜り
砂漠にも虫氷河にも虫

秋湯き即席麵を試食して
いないいないばあきやつきゃ笑ふ子

産院の受付時間終りたり
遠く近くに豆腐屋の笛

花の昼眼まぶしき濤の照り
風を下して蜜蜂の群

乞食葱

福井隆秀

捌

俳席にかすかなにほひ乞食葱
麗らかな陽の障子越しになる

鍵つ子のはしやぎてゐたり風揚げて
ドッグフーズを買ひに行く道

手に余る荷物背には今年酒
早帰りして十五夜の宴

庫裡裏で糞虫ひとつゆらゆらと
視線感して膝を揃へる

絶対に認めぬ夫の以遠権
悪びれず入る昼のモーテル

残されし遺書に謎めく二三行

晴 町

晴 江

晴 江

晴 江

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

晴 光

綺堂選集いつか紛失

ナイターの審判員が仰ぐ月

金魚すくひは兎等にさそはれ

淨瑠璃のさわりばかりを暗んじる

カルチャーセンター一帳羅着て

花見をば知らぬ新入社員連れ

魔もの恋猫あやかしの声

春の閨尼僧ひたすら待ちかねつ

木戸のきしみにそつと立ち寄り

旧道をそれればずらり愛の宿

百円玉でビデオ再現

お月様綺麗といつて口説かれる

里山越えて帰る雁

団子坂厚物咲の鏡ひ咲く

お仙の茶屋ですするラーメン

円高で社長どこかへ逐電し

目なし達磨の売れぬ唄

顔見世の招き看板灯のともり

微震余震のつづく昨今

サイン掲げマルコス追ひ落す

孤衆少衆分衆の世ぞ

ぼけもせず黒糖焼酎楽しんで

書架に飾れる盃の数々

ワープロを妻に教へて花信打つ

居合抜にて蝶払ひたる

連句会案内

秀 連句教室 会費千円

哲 日時 第一日曜日 午後一時—五時

栖 会場 関口芭蕉庵

司 文京区関口二ノ十一ノ三

栖 (電) 九四一—一四四五

司 。A・C・C連句実作講座

哲 日時 第二・四水曜 午後一時—三時

栖 会場 新宿住友ビル四十八階

司 朝日カルチャーセンター

同 新宿区西新宿二ノ六ノ一

栖 (電) 三四四—一九四一(代表)

哲 入会金 五千元

栖 受講料 一万九千八百円(十回)

哲 。猫養会(会員制)年四回

司 (一月・四月・七月・十月 第三水曜日)

哲 会場 松声閣

司 文京区新江戸川公園内

栖 (電) 九四一—九六四九

司 。柏連句会

哲 日時 第三日曜日 午後一時—五時

栖 会場 光ヶ丘近隣センター

秀 (南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ

ーケット下車)

雁帛往来

▽旅行には二十韻がいい、という事を証明するよう本号は二十韻が多い。皆さんも旅先では二十韻を是非お試下さい。

▽約三年を要した「連句辞典」が近く校了、六月末発売の見込みがついて、編者一同はっとしている。解説用語三二二。人名編には五四人の小伝と作品を収録した。定価は三千五百円から六百円の間。どうぞよろしく。

季刊「連句」第十三号

定価 五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十一年六月一日

編集人 杉内 徒 司

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二

電話 (〇四七) 一一九二

振替口座 東京七―五二―一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四
電話 〇三(九八〇) 二七一—一五

